

東京オペラシティ アートギャラリー 2026 年度の展覧会スケジュール

2026 年 4 月 16 日（木）－6 月 24 日（水）＊60 日間

企画展 拡大するシュルレアリスム 視覚芸術から広告、ファッション、インテリアへ



ルネ・マグリット 《王様の美術館》1966 横浜美術館

シュルレアリスムは、1924 年にアンドレ・ブルトンが定義づけ、フロイトの精神分析学に影響を受けた文学運動として発生しました。違和感がある風景や夢のような幻想的雰囲気など、その表現に一定の傾向を見出すことも可能ですが、シュルレアリスムとは、理性によって分断された世界を乗り越え、新しい現実を求めようとするあらゆる創造行為をさしています。「日常を変える」ことと「世界を変える」ことをひと続きに捉えたシュルレアリスムは、雑誌や広告、ファッション、室内デザインといった日常に密接した場面にも広がり、社会全体に影響をもたらしました。本展覧会は国内に所蔵されている多様なジャンルの優品を一堂に会し、社会全体へと拡大した新しいシュルレアリスム像を示します。

担当：瀧上華

収蔵品展 幻想の景色と不思議ないきものたち | 収蔵品展 086 寺田コレクションより



川口起美雄《柔らかな隕石》1993 撮影：斉藤新

当館の寺田コレクションの中には幻想的な事物をテーマにした作品が含まれています。具象画でありながら不思議な風景を描いた作品や、見慣れているようででありながら現実世界には存在しないいきものを描いた作品には、精神世界の深淵を見つめたコレクター寺田小太郎のまなざしを感じることができるでしょう。寺田コレクションの不思議な作品をご紹介します。

担当：福島直

project N project N 102 大上巧真



《blueprint》2023 撮影：Ryusei Okada

幼少時から皮膚の過敏による身体的違和感を抱いたという大上巧真にとって、絵画は「拡張された身体」であり、制作は自己の身体を確認する営みに他なりません。身体的違和感は、さらにパーソナルエリア的、対社会的な意識と結びついて、現在の大上の制作を導いています。強い色彩とフォルムの起点には、つねに大上自身の身体意識があるのです。

担当：福士理

2026年7月18日（土）－9月23日（水）＊58日間

企画展 ほぼ空：青木淳＋リチャード・タトル



「青木淳＋リチャード・タトル」展覧会プラン 2025

美術家のリチャード・タトルと、建築家の青木淳の二人展。タトルにとって美術作品とは“光”であり、ある瞬間に捉えた真実、美しさ、充足感を他者と分かち合う媒体だといいます。青木にとって建築とは“空気”であり、人それぞれが持つ異なる価値観や速度を許容する自由な空間をつくることだといいます。タトルの美術作品と青木の建築には、互いの領域を軽やかに超えていく親和性があります。光と空気—世界を満たす要素に喩えられる両者のコラボレーションは、互いに融合し、またそれぞれとしてあり、開放的かつ愉快的空間を作り出すでしょう。本展は、東京オペラシティアートギャラリーの空間の潜在力を、美術と建築の双方向から別様に引き出すことを試みます。

担当：能勢陽子

収蔵品展 青木淳が選ぶコレクション | 収蔵品展 087 寺田コレクションより（仮称）



野又横《崇高なる空 II-5》1991

建築家の青木淳の選定によるコレクション展。建築と美術を架橋するように、新たな視点と空間との関わりのなかで作品を構成します。全展示室がゆるやかにつながる、企画展とも連動した展示になります。

担当：能勢陽子

project N project N 103 東山詩織



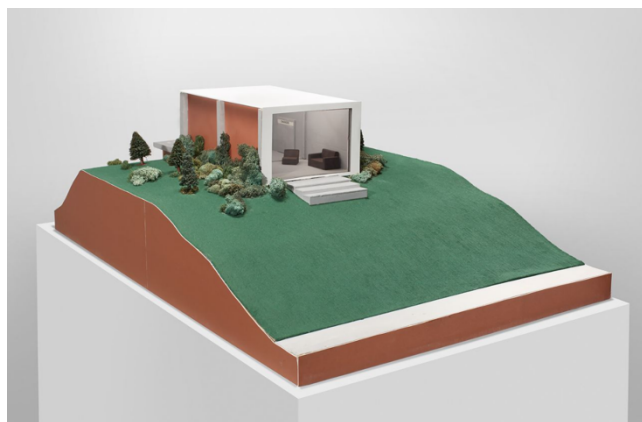
《Blue Gingham Sheet》2025 個人蔵 撮影：坂本理

東山の絵画には、人や樹木、テントなどが描かれており、一見、牧歌的な風景画にも見えます。東山が一貫してテーマとしているのは人と人との距離感です。境界を示すモチーフは、関係性を完全に遮断するのではなく、緩衝材やつなぎとしての役割を持ち、適切な距離を取るためのものとして、優しい色合いで描かれています。

担当：福島直

2026年10月17日（土）－12月20日（日）＊56日間

企画展 ダン・グレアム Dan Graham



《Clinic for a Suburban Site》 1978
©Dan Graham. Courtesy of Dan Graham Estate, Marian Goodman Gallery, and Taka Ishii Gallery
撮影：高橋健治

ダン・グレアムほど一言で語り尽くせないアーティストはいないでしょう。1942年にイリノイ州に生まれ、ニューヨークで活動を始めた彼は、ギャラリー運営から雑誌広告の体裁をとった作品、写真、ビデオ、建築的立体作品の制作、批評やエッセイの執筆など、実にさまざまな実践で知られています。多面的／多角的

（Multifaceted）な活動は再評価が進み、若い世代の注目を集めています。2022年、79歳で逝去しましたが、最後に取り組んだのはグレアムが終生関心を注いだ建築をテーマにした展覧会のキュレーションでした。本展の前半は、初期から晩年までグレアムの代表作を展覧し、後半はポルトガルで開催された建築展「Not Post-modernism」を「遺作」として展開します。展覧会の中に展覧会を組み込む入れ子構造により、たぐいまれな彼の思考を浮かび上げさせます。グレアムと親交が深かったアトリエ・ワンが会場構成を担当します。

担当：野村しのぶ

収蔵品展 秋の風景 収蔵品展 088 | 寺田コレクションより

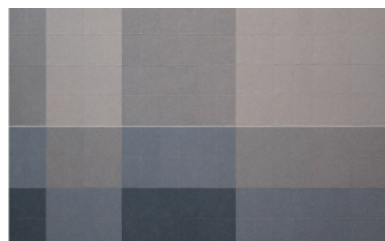


松本祐子《月の雫》1995 撮影：斉藤新

当館の寺田コレクションには、日本画が数多く収蔵されています。それらの作品には、武蔵野の自然を愛し自ら造園も手掛けていたコレクター寺田小太郎の自然へのまなざし、また「日本的なもの」とは何かを問い続けた氏の問題意識が反映されています。本展では会期に合わせ、秋を感じられる作品を紹介します。

担当：瀧上華

project N project N 104 田中藍衣



《Your Movement》2025

日本画の技法で抽象絵画を制作する田中藍衣。粒子が粗く、混色しても個々の色が存在を主張しつづける岩絵具の制約を逆手に取り、むしろ制約の中から必然的に生まれてくる表現を探求しています。寡黙でミニマルな、強靱な表現の根底には、社会の中で生きる田中が日々感じる「存在への問い」が秘められています。

担当：福士理

2027年1月16日(土) - 3月22日(月) *56日間

企画展 カイ・フランク展 時代を超えるフィンランド・デザイン

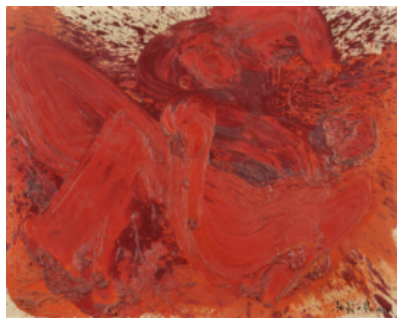


《KF 486》ゴブレット 1968、1969-71
©Architecture and Design Museum 撮影：Rauno Träskelin

フィンランドを代表するデザイナー、カイ・フランク(1911-1989)は、不要な装飾を排した普遍的で機能的、かつ汎用性の高いデザインで知られています。最小限の器で日常を豊かにするその哲学は、戦後の困難な時代にフィンランドの家庭に広く受け入れられ、今も世界中で愛されています。また、限りある資源を尊重する姿勢は、今日のサステナビリティの理念を先取りするものでした。本展は、ヘルシンキのアーキテクチャー・アンド・デザイン・ミュージアムが2011年に開催した回顧展をもとに、同館のコレクションを中心に構成します。ガラス、磁器、ファブリック、デザイン画など約250点を通して、初期から晩年に至るフランクの創作の軌跡を紹介します。さらに、写真や映像資料を交え、日本との交流や後進のデザイナーへの影響にも光を当てます。

担当：福島直

収蔵品展 物質的恍惚 収蔵品展 089 | 寺田コレクションより



白髪一雄《長髪》1961 撮影：早川宏一

「事ではなく物を描く」といったのは画家の鶴岡政男(1907-1979)でしたが、戦後美術において、物質とどう向き合うかは、多くの作家たちにとって喫緊の課題でした。戦前からの抽象の開拓者たちや、具体からもの派、さらにそれ以降の世代の作家まで、この問題をめぐるそれぞれの実践を読み解きます。

担当：福士理

project N project N 105 菅原果歩



《飛鳥滞在記》 2021-2022

菅原果歩は、野鳥の生態を観察し、絵画やドローイング、青写真、日記などにより、詳細な記録を続けている作家です。野営をして一日中鳥を観察し、その毛並みの一本一本まで丁寧に描いた絵やドローイング、また採取した羽根や周囲の落ち葉を貼ってびっしりと描き込んだフィールドノートは、人間中心主義的な視点を越えた、自身の内側と自然との接点を探る思索の軌跡なのです。

担当：能勢陽子

広報に関するお問合せ

東京オペラシティ アートギャラリー【広報】市川靖子、吉田明子

Tel : 03-5353-0756 Email : ag-press@toccf.com